サイエントロジー

その宇宙論、人類学、倫理と方法論の体系



レジ・ドリクブール 宗教社会学教授 リール第3大学 リール、フランス



1995年9月22日



サイエントロジー

その宇宙論、人類学、倫理と方法論の体系





サイエントロジー その宇宙論、人類学、 倫理と方法論の体系

目次

I. サイエントロジーは宗教なのか?	1
I.I. 宗教とは何か?	1
I.II. サイエントロジーの内容	2
宇宙論:サイエントロジーにおける超自然的存在	2
ダイナミックスとエシックス	3
サイエントロジーの人類学	4
A. オーディティング	5
B. 宗教的トレーニング	6
C. 儀式	7
D. 組織	7
E. 聖職者カウンセリング	7
II. サイエントロジストの特徴	7
III.サイエントロジストは信条の正当性についてどう考えているか?	8
III.I. 実用性	10
III.II. 信仰の蓋然性	10
III.III. 真実の相対性	11
III.IV. 適合性	11
III.V. 人生の意味	11
III.VI. 科学との関連性	12
III.VII. サイエントロジーの技術の重要性	12
III.VIII. 宗教的伝統	13
IV. 結び	13
著者について	16



サイエントロジー

その宇宙論、人類学、倫理と方法論の体系

本論文の目的は、社会学的な観点からサイエントロジーを評価することにある。

問題提起:サイエントロジーは宗教なのか?宗教であるとすれば、どういった形式の宗教なのか?本論文では、いくつかの点からこの疑問に答えていく。

本論文は、サイエントロジーの諸側面を、今日の私たちが捉えている通りに描いたものであり、 これを糾弾したり、弁護したりする意図はない。

1. サイエントロジーは宗教なのか?

|... 宗教とは何か?

本論文で、宗教の定義について根本的な議論を行うことは不可能である。しかしながら、実際的な見地に立って、ほとんどの宗教に共通する最低限の特徴について合意を形成することならできるだろう。こうした視点に立つと、新しいタイプの宗教が主張する宗教の定義を無視することになるが、これは承知の上である。ブライアン・ウィルソンは宗教の特徴として次のような点を挙げているが、筆者もこれに賛成である。

- 宇宙には唯一ないしは複数の超自然的な力が存在すると考え、それに宇宙の意味を見出す宇宙論。人間という概念は、地上的な存在を超越した概念である。前世や来世があるとする。人間を有限な存在とは考えない。
- こうした宇宙論から導き出される倫理。宇宙を上述したようなものと考えた場合の、生き方の指針を示すもの。
- 人間を超自然的な原理と接触させるための手段。祈り、宗教儀式、瞑想法など。
- 信徒の集団。規模にかかわらず、信仰を持続し、周囲に広め、救済という恩恵を実現することのできる集団。

次のような諸要素がどのように組み合わさっているかで、宗教を分類することができる。

- (1) 理神論的な哲学。宇宙論を提示し、存在の意味を説明するが、人間と超自然的な力とを 結びつける意図はない。
- (2) 個人の不思議な能力。経験的な技法を通して経験的結果を得ることを目的に行使される力。
- (3) フリーメーソン団のような理神論的な結社。「世界の創造者」の存在を認めるが、儀式は 人間と神とを結びつけることを目的として行われるものではない。

|.|| サイエントロジーの内容

サイエントロジーで扱う内容には、宇宙論、人類学、倫理体系、宗教儀式、オーディティング、身体浄化法、トレーニング、コミュニケーション理論がある。

宇宙論:サイエントロジーにおける超自然的存在

サイエントロジーの創始者である L. ロン ハバード (1911-86 年) は、原初の魂に関する命題を復活させた。彼は、宇宙の誕生以前に霊魂はすでに存在していたと主張し、これをセイタンと名づけた。セイタンは形も質量も持たない存在で、無限の時間の中で生き、空間を占有することもなく、全知全能、不朽不死、あらゆるものを創造する能力がある。これら実体のない存在が、至高の存在とともに宇宙を創造したのだが、その過程でセイタンは自らの罠にはまり、自分の創造物の中に捕らえられてしまった。その創造物が人間であり、また、メスト (MEST 物質宇宙 = matter[物体]、energy[エネルギー]、space[空間]、time[時間])であるが、セイタンはこれらを創ったのは自分自身だということを忘れてしまっている。そのため、セイタンは全知全能の力を失い、脆弱な人間となってしまった。それ以来セイタンは、宿る肉体を替えながら、何度も何度も人生を繰り返している。今日では、セイタンは自分の真の精神的アイデンティティーを忘れ、人間の肉体こそが自分だと信じている。しかしながら、霊魂こそが人間の起源なのである。つまり、肉体と心とセイタンが合わさって人間となったのである。

これは、完全な人間が欠点だらけの人間に堕落していく、というグノーシス主義的な見解である。 あるいはまた、神々が人間の営みに干渉しているうちに人間世界に巻き込まれていく、ギリシャ劇の 焼き直しでもある。 魂を解放するためには、延々と続く人生に終止符を打つ必要がある。サイエントロジーは、人間をも とのセイタンの状態に近づけようとするものである。

ダイナミックスとエシックス

サイエントロジーは宇宙の中で働く衝動や存在の意味について説明する。

宇宙は動的な衝動によって動機づけられている。この衝動こそが、生存をもたらす力であり、存在の根本原理でもある。この衝動は個人や民族によってまちまちで、生理機能や環境そして経験によっても変わる。この衝動は、人間が人生のどんな点に固執し、どのように知力を働かせるかを左右するものである。それゆえ、個人や集団および民族がその生存にかかわる問題を解決する能力であるとも考えられる。

個人の徳性は、生存のために何を成したかという点から評価される。こうした観点に立つと、善とは建設的な行為であり、悪とは生存を脅かす行為である。知っての通り、サイエントロジーのエシックスは(ベルクソンの閉ざされた倫理思想のように)忠告を並べたものではない。人生の意味をよく理解して、すべて自分のものにした結果生まれてくるもので、羅針盤として個人を導いてくれる、開かれた倫理体系と言ってよいだろう。

サイエントロジーでは、スピリチュアリズムを信奉する人々と同じく、「罪」を否定する。存在するのは、人間、家族、社会、神に危害を及ぼすような誤った行為だけである。こうした過ちを見つけて正すのがエシックスの重要な役割なのである。

生物体が複雑化するにつれて、動的衝動も複雑になっていく。「正常な」(正道を外れていない) 人間の場合、この衝動は、対象を異にする8つの領域に分けられる。

- (1) 個人としての生存を目指す動的衝動である、自己のダイナミック。快楽を求め、苦痛を 回避する。食物、衣服、住居、個人的野心など、個人的な事柄に関与する。
- (2) 生殖行為へと向かう、性のダイナミック。
- (3) 社会生活を支配する、グループのダイナミック。個人が属している集団の存続のために個人を動かす。
- (4)人類としての生存を目指す、人類のダイナミック。

- (5) 生命そのもの、すなわち、植物と動物の両方を含めたあらゆる生物のために、人間を働かせる、動物のダイナミック。
- (6)物体、エネルギー、空間、時間という物質宇宙での個人の生存を目指す、物質宇宙のダイナミック。
- (7)精神的、あるいは霊的存在としての生存に向かう、精神のダイナミック。
- (8) 造物主あるいは至高の存在に向けての、無限のダイナミック、あるいは神のダイナミック。

最初から4つ目までのダイナミックスは、ダイアネティックスと関係が深い。後の4つは1950年 代初めに追加されたもので、形而上的な性質を持っており、サイエントロジーでのみ扱われる。(以 下の項目も参照)

信徒たちには、8 つすべてのダイナミックスに従うことが求められる。自己探求のチェックリストを 用いると、各領域での自分の状態を評価することができる。自分がどの領域に弱いかわかったな らば、聖職者の援助のもとに、弱点を克服する方法を探していく。

サイエントロジーの人類学

L. ロン ハバードの教義の中では、個人とは、肉体と心とが密接につながっているものである、と説明されている。

心と人間の本質に関する研究結果に基づいて、L. ロン ハバードは 1950 年に『ダイアネティックス:心の健康のための現代科学』を著したところ、たちまちベストセラーになり、その結果、ダイアネティックス協会が設立された。この時点でダイアネティックスが目指していたものは、単なる心の解放、すなわち精神的外傷からの解放にすぎなかった。しかし、さらに研究を続けたハバードは、1950 年代の初めに精神の領域にまで踏み込み、人間は無数の人生を生きている不滅の魂であり、物理的な次元を超越した存在であるということを発見した。そして、1954 年に最初のサイエントロジー教会が設立された。

サイエントロジーでは、心を、分析心と反応心というふたつの部分を持つコンピュータにたとえている。

分析心は、いわば知性を代表するものであり、決して間違いを犯さない装置、個人の意識の中枢部 (「私」という人格の土台)であると考えられる。分析心とは、知覚(外界からの刺激)を処理し、標 準記憶装置に蓄えられている想像や記憶を操作するコンピュータのようなものである。この記憶装 置は、生まれてから死ぬまでの間、目覚めていても眠っていても、さまざまな感覚器官から送られてくる情報を常時受け取っている。こうした情報はすべて、年代順に、何種類ものファイル(聴覚、視覚、触覚など)に蓄積され、分析心がいつでも自由に使えるようにしてある。分析心は常時、思考機能を働かせている。蓄積データのコピーを受け取って、新たに送られてきた情報との比較検討を行い、個人が遭遇している問題に的確な回答を出すことに努める。また、歩く、タイプを打つといった日常動作を行う場合は、余計な情報がなくとも、準備回路を作動させて習得済みの機能の調整を行う。一般に、分析心は、誤りを犯すことのない合理的なコンピュータのようなもので、精神障害や心因性の障害を引き起こすことはないと考えられる。

したがって、常軌を逸した行動を起こすのは、エングラムを溜め込んでいる反応心のしわざである。 エングラムと記憶とでは、少々意味合いが異なる。エングラムとは、個人が受け止めた知覚を細部 に至るまでひとつ残らず記録したものであって、失神している間や麻酔がかかっている間のように、 完全にあるいは部分的に意識が途絶えている間に受けた刺激や苦痛も記録されている。

A.オーディティング

サイエントロジーにおいて最も重要な宗教実践は、**オーディティング**と呼ばれるものである。サイエントロジストにとってオーディティングとは、秩序立った精神修養の道筋である。具体的にどんなものなのだろうか?

オーディティングを受けると、現世での出来事だけでなく、時間を遡って、前世での出来事まですべて思い出す。とりわけ重要なのは、精神的外傷を負ったような出来事である。精神的外傷を受けると大量のエネルギーが阻害されるために、活発な行動や理性的な思考が妨げられ、個人としての能力が低下してしまうからである。こうした出来事を思い出し、反応を取り除いて消散させることで、その出来事に縛りつけられていたエネルギーが解き放たれ、有効に利用することができるようになる。これによって、心の安らぎや幸福感が得られ、さらに、過去の出来事が身体的、精神的な病気の源になっていたことに気付く。こうした気づきと本人の努力によって、苦痛が癒されていくのだと考えられる。例えば、何かに苦しんでいる人がオーディティングを受けるうちに、自分は前世で抑圧されていたということに気づいたとする。心に傷を受けた出来事を思い出し、それを克服することができれば、過去の出来事にまつわる苦痛に悩まされることはなくなる。レビ・ストラウスが著書「Anthropologie structurale」で論じたような、シャーマンによる治療に見られる、個人の神話の構造のひとつを思い出させる。

ハバード流に言うならば、サイエントロジーのオーディティングとは、分析心の力を使って反応心に働きかけ、肉体を伴ったセイタンの回復力を阻害している有害なエングラムを取り除こうとするものである。

オーディティングを受けることで、ふたつのことが起こる。(1)過去を探求することによって間もなく、 自分は肉体を持つ全能の魂なのだが人間であるがゆえに制約を受けている、ということがわかる。 (2)エングラムを消し去ることで、「クリアー」の状態へと至る。

エングラムを排除すると、存在の再生が促進される。そのことは、生命力の増大に現れる。生存能力が増し、自分の能力に自信が湧き、そのことが声の調子にも現れてくる。

サイエントロジストにとってオーディティングとは、聖職者によって行われるカウンセリングの一種だと言える。ブライアン・ウィルソンも (1994 年の「サイエントロジー」の中で) 同様の見解を示し、サイエントロジーは霊的なものとの関係を明確に体系化し、「メソジスト派」の教義に見られるような方向性を打ち出していると考察している。私たちにとってオーディティングは、宗教生活を合理的に説明してくれるものでもある。

オーディティングは、東洋の宗教と同じく、人間をその霊的で不滅な部分へと近づけるものであり、 サイエントロジストにとっては最も重要な魂の冒険の旅なのである。

セイタンが自らの不滅性を確信し、精神的成長を遂げることができるのは、オーディティングを通してである。オーディティングを通して人は、自らの精神性や至高の存在との関係を、より深く理解するようになる。また、オーディティングによって人は、8つのダイナミックスすべてをより深く理解し、それらに沿って能力を発揮できるようになる。

サイエントロジーは心理療法の一種にすぎないと誹謗する者もある。しかし、方法も形式も同じではないし、その目的に至っては全く異なる。心理療法は心を扱うが、これに対し、サイエントロジーが目指すのは魂の救済である。1) オーディティングを受けた者は、人間の二元性を理解するようになり、前世の存在に気づくことにより、ひとつの恒久的原理がすべての人生を貫いていることを理解する。2) サイエントロジーはまた、セイタンをも癒す。セイタンから心的要素や肉体的要素を剥ぎとっていくことで、最初に備わっていた力が回復する。セイタンに代表される個人は、「自由に生き」られるようになる。

B. 宗教的トレーニング

宗教実践のもうひとつの核になっているのは、サイエントロジーで「トレーニング」と呼ぶものである。トレーニングとは、精神の啓発のため、また、サイエントロジーの聖職者としての訓練のために、サイエントロジーの教典を徹底的に学ぶことをいう。

サイエントロジストは、自らのすぐれた精神的意識を、人生のあらゆる状況で利用しなくてはならないと考える。彼らは、サイエントロジーの教典の研究を通して、この道を見出していくのである。これ

は、ユダヤ教におけるタルムードの研究や、仏教における経典や密教の奥義の研究のような、他の宗教の悟りの研究に類似するところがある。また、オーディティングとトレーニングは同時に進められる。個人の能力と責任そして知識を同時に高めていく必要があるからである。トレーニングを受けるうちに、自分にセイタンとしての力が備わっていることに気づき、自分以外の精神的存在とコミュニケーションを交わせることも発見するようになる。どのようにオーディティングを行えば、他人の霊的進化を促すことができ、信徒としての責任をいかに果たせるか、といったことも、やはりトレーニングの中で学んでいく。

C. 儀式

サイエントロジー教会でも、主だった宗教が行っているような、命名式、日曜礼拝、結婚式、葬儀といった宗教儀式が執り行われる。

D. 組織

サイエントロジー教会は、現代文明において特有の複雑な組織形態をとり、多数の団体組織を従えている。いかなる宗教も、その創生期の社会に広まっていた組織形態を模倣している。例えばごく最近だと、エホバの証人の組織は工業化社会の組織にまねて作られている。これに対して、サイエントロジーの組織は脱工業化社会の組織スタイルを採り入れている。

組織化の目的は、教会を管理運営し、魂の救済の教えを世に広めていくことにある。また、国際的な布教の任をも負っている。

E. 聖職者カウンセリング

サイエントロジーにおいて認定を受けた聖職者たちは、セレモニーを執り行う他に、オーディティングも行う。

||. サイエントロジストの特徴とは

サイエントロジー教会の研究において、ロイ・ウォリスとローランド・シャノンは信徒たちの特徴を描き出し、その多くの点で二人の見解は一致している。

これらの筆者は、フランスにおいて 285名の信徒を無作為に選び、同じ項目についてデータを収集しようと試みた。それを集計した結果、信徒の3分の2が男性で、大多数が $26\sim41$ 歳の間であった。ほぼ全員が結婚しており、子どもの数は $1\sim2$ 人であった。

ほとんどのサイエントロジストが都市部で生まれ育ち、18 歳まで出生地で過ごしている。社会によく溶け込んでおり、地位の高い職業に就いている(仲介業、上級管理職、実業家、職人、経営者など)。42%が中等教育を修了しており、専門技術、貿易、芸術、文芸などの分野で活躍している。

フランスのサイエントロジストのほとんどは、カトリックから転向した人たちである。16%の者が、自分は無神論者だと述べている。以前信仰していた宗教に対し、現在どんな姿勢で臨んでいるかを語ることに同意してくれた人たちのうち、半数をやや上回る者が今もなお前の宗教を信仰していると答え、中には、前の宗教をより深く理解し、精神的な生き方ができるようになった、と語る者もあった。サイエントロジーを実践していても、必ずしも前の宗教から離脱してしまうとは限らない点は注目すべきだが、実際問題としては、サイエントロジーは完結した宗教であり、サイエントロジストが以前の宗教から離れずにいるのは、概して社会的なつきあいや家庭の事情のためである。

III.サイエントロジストは信条の正当性についてどう考えているか?

L. ロン ハバードの提唱したサイエントロジーの教義は、「応用宗教哲学」と呼ばれているが、これを 正当だと認める根拠について述べている文献がある。こうしたものを読むと、サイエントロジーの理 想は、今日の西欧社会の慣行によく溶け込んでいることがわかる。

サイエントロジーの教義は、啓示された道徳としてではなく、人間の理性を正しく働かせた結果 生まれたものであり、自由な社会の理想と価値を謳っている。具体的に挙げると、個人的な成功、 野蛮な行為を回避するための競争倫理、個人をさらに幸福にするための経済力や科学技術の向上、 たゆみない文明の進歩への信頼などがある。サイエントロジーの教義は、そういったものを人間の 潜在力や、また個人の目標と文明全体としての目標とが調和する可能性の中に見出している。こう した理想に対する信念は、人間が本来持っている性質によって正当化される。つまり、人間の本質 は善であり、したがって、良き事柄を、すなわち最適な生存を熱望するからである。もしも、能力を 発揮できずにいるとしたら、あるいは、文明の進歩を促すような倫理を実践できずにいるなら、そ れは正道を外れているからであって、的確な技術を用いさえすれば、これを正すことが可能である。

要するにサイエントロジーは、人間に対し、原初の魂が持っていた全知全能の力を回復せよ、そして世界の創生期に生きていたような人類を産み出せ、と説いているのである。これは一種の後退的ユートピアの発想であり、過去のある時期に存在した、完全なる人々の住む世界へ戻る巡礼の旅こそが進歩だと考えることにより、進歩というものに精神的な意味を与えようとするものである。サイエントロジーの教義は、人間の責任を喚起している。正道からの逸脱を正さなければ、社会はますます野蛮な方向に堕ちていくが、逸脱を正すならば、戦争や暴力のない活力に満ちた社会が実現で

きる 一 さあ、どちらを選択するのか、と。L. ロン ハバードは、個人の責任を問う風潮を重んじ、幸福、効率、繁栄、人格的発達を目指して進んでいこうと提唱しているわけだが、この主張は、高度に発達した現代西欧社会を支配する啓蒙主義的精神とそれほどかけ離れてはいない。

したがって、西欧の資本主義社会の状況を考える限り、サイエントロジーの教義は現実と非常にマッチしていることがわかる。教義の習得方法や教義体系の面から見ても、サイエントロジーは、資本主義社会に適合している。宗教的修練の方法は、系統だった一連の課程の実習を交えて学んでいくという、ほとんどの教育システムで用いられている学習方法と変わりない。また、サイエントロジーの教義体系は、信徒たちがすでに獲得している知識とよく似ている。信徒たちはこれを合理的であると感じ(これは、概念、仮説、公理とともに科学的証明のように提示される)、科学的だと感じる(L. ロン ハバードの発見を記録した何冊もの分厚い本に加え、ハバードのさまざまな試行錯誤の過程や、問題とその結果の記録が収集されたものがある)。また、このシステムによって習得したテクニックは、すぐに実生活に応用でき、はっきりと定められた順番に従って実行すれば、どんな結果が出るかが予想できるようになっている。こうしたトレーニング様式は、サイエントロジストが以前に学校や大学で受けた教育形式とよく似ている。

サイエントロジストには会社経営者、重役、専門家、スポーツ選手、芸能人なども多い。大抵のサイエントロジストが、普通教育の証明試験で最低でもAレベル(上級)を取得しており、それ以上のレベルを取得している者も少なくない。サイエントロジーには以上で述べたような特徴があるため、すでに教育課程を修了している信徒たちにとっては非常に馴染みやすい。さらに、サイエントロジーは、現代社会に共通する不安(暴力、戦争、核の脅威、環境汚染)に言及しているということもつけ加えておかねばなるまい。

これに対し、こうした目標を達成するために必要とされる生命力は神と同一視されており、このことがサイエントロジーの宗教運動に精神面での正当性を与えている。日曜礼拝の場で、チャプレンは、「生存へと向かう上昇は、それ自体、神へと向かう上昇なのです」と告げる。この言葉から、サイエントロジーの宗教運動を神聖なものと見ていることがわかるが、これは多くの形而上的な運動に共通することでもある。

サイエントロジストがサイエントロジーを正当である、と考える理由のふたつ目は、その技術が実生活に役立つという点にある。サイエントロジーは、エシックスの技術を応用してサイエントロジーを実践すれば必ず人生が向上し、幸福感が増し、心が癒され、成功がもたらされる、と主張する。すぐによい結果が得られなくても、サイエントロジーの技術が否定されたことにはならない。失敗したと思われる時にはまず、自分の中に成功を否定する気持ちがありはしないか、社会的な人間関係に問題がないか、技術の適用方法が誤っていないか、といったことを吟味すべきなのである。いずれにせよ、サイエントロジストは、サイエントロジーの技術で解決できない問題はないと信じているので、すぐにはうまくいかなくとも辛抱づよく努力する。サイエントロジーの教えに正しく従えば、必ず効果

が現れてくるものなのである。一般的な技術は、サイエントロジーの本を見ればわかるし、その技術をどう適用すればよいかも、細かく標準化されている。トレーニングで学んだ教えに従って一歩一歩進んでゆけばよいのである。技術による効果を体験することによって、その正当性に対する確信が強化される。望みが達成されたことで技術の妥当性が証明され、その結果、応用宗教哲学、およびそれが唱える精神概念の正当性も証明されることになる。

筆者らは、公式文献がサイエントロジーの正当性として掲げている事柄と、信徒たちが正当性の証しと捉えている事柄とが、果たして同じかどうか知りたいと考えた。そこで、15名のサイエントロジストに面接を行い、サイエントロジーを正しいと信じる根拠を尋ねた。面接対象者は、サイエントロジーを始めて $5\sim 20$ 年であり、いずれも高等教育を受けていた。彼らの主張はいくつかのカテゴリーに分類できる。

Ⅲ... 実用性

質問に対してサイエントロジストたちは、実生活が目に見えて改善されたのだから、サイエントロジーは正しいに違いない、と答えた。暮らしが見違えるほどよくなった、と答えた者もいる。身体が丈夫になった、家庭が円満になった、などである。また、最初から明確な成果が予測できるからサイエントロジーを続けている、という回答もあった。こうした信徒たちにとって、サイエントロジーは実生活に「役立つ」宗教なのである。

|||.||.信仰の蓋然性

サイエントロジーの原理の正当性を証明しようとしても、どうしても個人的には「証明しえない」領域が残ることになる。サイエントロジストの多くが、L. ロン ハバードの教義をすべて自分で証明できたわけではないので、仮説として信じている部分もある、と認めている。

神の存在を信じるかどうかがよく議論にのぼる。信徒の中には、至高の存在があることを信じて 疑わない者もいる。こうした人々は、神の存在を確信しているがために、子供時代に信じていた 「カトリックの神」との間に不協和音を抱えている。また、オーディティングを受けている間に前 世と接触し、それがきっかけで無限の存在を信じるようになった者もいる。彼らはこんなふうに 語る。「最初は気付かなかったんですが、オーディティングを続けているうちに、無限の存在であ る第8のダイナミックが本当に存在するのだ、ということを悟りました。初めはわからなかったの ですが、今では、それが存在するということがよくわかっています」。しかしながら、このように 神(彼らの言葉で言うなら、第8のダイナミック)を自明の存在と考えているのは少数派であって、 信徒の大部分は、他の信仰の場合と同様に、存在が証明されなければ信じられないと感じている。 神の存在を一種の仮説として捉えている者もいる。ひとつには、L. ロン ハバードの教えの一部分 しか証明できなくても、残りの部分を真実ではないとする理由はないからである。次のように語った者もいる。「万物を創り出し、宇宙を創造した者の存在は知っています…至高の存在があることを信じています。それは時間の問題です。彼は今もまだ存在しているのでしょうか?今の段階では、私がそれを知る方法はないことがわかったのです。それは一部は信仰であり、一部は認識です。なぜなら70%を自分で証明できれば、残りの30%についても正しいに違いないと考えるものです。」信徒になって20年経つ、47歳のサイエントロジストの言葉である。また、ある信徒は、自分よりも高いレベルに到達したサイエントロジストが神を見出したと言うなら、やはり神は存在するに違いない、と考える。

信徒たちは、神について探求を続けていくうちにそれぞれが異なる発見をすることになるかもしれない、とも認めている。また、多くのサイエントロジストたちが、「第8のダイナミック」を完全に信じるためにはもっと個人的に探求してみる必要があると感じている。しかし、神の存在を期待している限り、神は存在すると言えよう。これは、蓋然性に基づいた信仰と呼べよう。

|||.|||. 真実の相対性

個人的探求に重きが置かれる場合には、サイエントロジストが精神的発達の道程のどの段階まで達したかによって、真実というものも常に相対的に変化する。先に述べたように、回答者のひとりが、時間を超越した真実と「今ここで」の真実というふたつの真実の違いに言及していたが、このことは真実の相対性を示している。

III.IV. 適合性

サイエントロジストたちは、サイエントロジーは今日の社会によく適合していると述べている。ある信徒は、サイエントロジーは現実社会によく適合しているので、実践しているうちに自分にとって当たり前のものになってしまったと語った。また、ある信徒は、サイエントロジーの道徳律は、他人を理解したり、うまく動かしたりするのに大変役に立つと感じている。社会改革のための申し分ない方法が見つかった、と語る者もあった。彼女は、サイエントロジーに関わる以前は社会主義の活動家だったのだが、サイエントロジーの技術に、自分の求めていた「社会を徹底的に改革する」手段を見出したのである。

III.V. 人生の意味

信徒たちは、自分の人生の意味が見つかった、と主張する。以前の自分は曇天の大海原を羅針盤も 目標物もないままに漂い続ける水夫のようだった、と語るある信徒は、サイエントロジーのおかげで 地図やさまざまな航海設備が手に入った、と述べている。サイエントロジストたちは一様に、人生の 意味がわかり、進むべき道が見つかった、と感じている。医学の勉強を断念したある信徒は、次のよ うに告白する。「なぜこんなふうに努力しなくてはならないのか、納得できませんでした。そうやって 快適な中流の生活を手に入れたとしても、そこに自分の求めるような人生の意味があるとは思えなかったからです。でも、サイエントロジーの中に人生の意味を見出すことができました。」

III.VI. 科学との関連性

今回の面接では、サイエントロジーの教義や技術の正当性を証明する根拠として、現在一般に認められている科学を引き合いに出す者はいなかった。これは、次のふたつの事実に反する。

- A. 指導者層には、以上で述べたような専門知識が要求されるという事実。
- B. L. ロン ハバードの「私たちはすでに科学と宗教とがぶつかり合うところにまで来ている、 という事実を真正面から受け止め、今後は、物質的な目標ばかり追求していくことを止める べきです。この事実に目をつぶっている限り、人間の魂の治療はできません。」という陳述。

仮説として、次のようなことが考えられる。

- A. 現在一般に認められている科学との整合性は、公式教義としてすでに認められている事実であるから、サイエントロジストが改めて証明するまでもない。あるいは、
- B. サイエントロジーの正当性を評価するには、公式見解に頼るよりも個人的な経験に基づくべきである。
- C. サイエントロジーの技術は科学に取って代わるものである。

筆者らはまた、サイエントロジー教会の姿勢が初期の頃とは違ってきていることにも気づいている。 教会は現在、自らを特定の目的を持った宗教運動として捉えており、以前に比べると、科学的な面 には正当性を求めなくなってきている。

III.VII.サイエントロジーの技術の重要性

サイエントロジーは、信仰の対象というよりは、むしろ実践の対象とされている。「ドゥーイング・サイエントロジー」という言葉を何度か耳にしたことがある。「サイエントロジーとは何か」をテーマに行った前回の面接では、信徒たちは技術の「適用」という点を強調していた。今回の面接においてもやはり、技術が実生活に役立つという点を、正当性の根拠とする者が多かった。

サイエントロジーは実用的な宗教であると言えそうである。

III.VIII. 宗教的伝統

宗教的伝統についての質問では、サイエントロジーは伝統に欠けるという点が指摘されただけだった。L. ロン ハバードは、仏教とサイエントロジーの関連性を主張しているが、これについて述べた者はひとりもいなかった。ちなみに、ハバードは、仏教とサイエントロジーの共通点を強調しながらも、仏教は残念ながら現世での生活に役立たないと述べている。

信徒たちは、科学との整合性について無頓着なように、宗教的伝統についても無頓着である。外的なものにサイエントロジーの正当性を求めようとは考えていないのである。自分自身で確信が持てさえすれば、それで十分なのだろう。L. ロン ハバード自身は、仏教を初め、古くからのさまざまな宗教とサイエントロジーとの間には類似点があるとしているが、信徒たちは、自分の信仰を神学の専門用語で語る必要も感じていなければ、宗教思想の伝統の中に身を置く必要も感じていない。

サイエントロジーの正当性の捉え方は、信徒によっては公文書とやや異なる。「確実な事実に基づく科学」ではなくて、個人的体験によって確認した後で初めて受け入れることのできる「いくつもの確実な事実に基づく科学」である。したがって、信仰は蓋然性を土台にしており、信徒が精神の階梯のどこまで到達したかで変わってくる。これに対し、サイエントロジーの技術に関しては教義の主張が受け入れられている。私たちは、救済を説く宗教に帰依する場合のように、ある種の行動を導くような、はっきりとわかる真実の根拠を扱っているわけではない。そうした宗教の場合には、信者たちは、祈るようにと教える信仰体系を受け入れるがゆえに祈る。しかしサイエントロジストは、ひとつひとつ事実を確かめながら、真実を裏づける十分な確証を得るに至るのである。あるサイエントロジストは、自分は「絶えることのない帰依」について話す方が好きだ、と私に話した。

信徒がすでにサイエントロジーの中で社会を理解する方法を見つけたこと、そしてそれによって社会と世界全体を変えることを主張していることから、彼らの宗教は、「信仰に基づいた有効性(fides efficax)」によって成り立っているようである。

IV. 結び

サイエントロジーは、宗教の持つさまざまな特徴を有している。具体的にいえば、独自の神学理論、すべての人間に備わる精神的要素への到達を可能にする修行体系、「非常に官僚的」な教会組織、宗教儀式などが挙げられよう。ミッシェル・デ・セルトー、ロイ・ウォリス、ブライアン・ウィルソン、ハリエット・ホワイトヘッド、ロニー・D. クリーヴァー、フランク・K. フィンといった、これまでに

サイエントロジーについて論じた人々は誰ひとりとして、サイエントロジーに最も批判的な者でさえ、 その宗教的性質を疑ってはいない。

筆者らは、サイエントロジーには次のような特徴があると考える。

- (1) サイエントロジーは、人が「健全な肉体に宿る健全な精神」として、自由に至る道筋を切り開くための技術を有している。L. ロン ハバードとサイエントロジストは、宗教生活を極めて合理的に捉え、インストルメンタリズム (環境支配の道具としての有用性によって価値が決まるとする考え方) の立場をとっている。サイエントロジーはよく仏教になぞらえられるが、当然といえよう。「技術的な仏教」と評する者もいる。また、オーディティング (聖職者によるカウンセリング) のシステマチックな特性ゆえに、メソジスト派の教義との間に類似性を見出す者もいる。
- (2) サイエントロジーを信じることで、信徒たちは、宇宙的、歴史的、個人的出来事に意味を見出せるようになる。また、個人の救済、集団の救済への解決法を手にしていると確信できるようになる。さらに、自分は外的要因の結果などではなく、自分の人生を形づくっている原因に外ならない、と思えるようになる。
- (3) L. ロン ハバードは、啓示を受けて救済への道を主張した予言者ではない。精神世界の研究者として登場し、魂の救済の方法を段々と打ち立てていき、ついに「成就」への道を見出した人物である。
- (4)サイエントロジーの土台を成しているのは、神秘主義的な要素を含む個人的な体験であって、信徒はこうした体験を通して自らの精神の本質と接触できるのである。これは「宗教的妙技」とも言えるもので、自ら積極的に関わっていくことこそが重要視される。したがって、集団礼拝のようなものは行わない。
- (5) サイエントロジーには「現世」の宗教という特徴があり、この点は、誠実に働いて得た成功は、魂の進歩の証しであると考える創価学会の思想に似ている。また、サイエントロジーのエシックスと、伝統的なプロテスタンティズムの倫理との間にも類似点がある。プロテスタンティズムでは、世俗的な成功は、聖籠を受けている証拠であると見なされる。一方サイエントロジーでは、世俗的な成功は、自らの人格を磨く努力が成果を現したのだと見なされる。つまり、個人の精神を束縛から解き放つ、心理解放術に助けられて身についた宗教的道徳律が、外に現れたものだと見なされる。非常に具体的な形で道徳体系が適用されたことになるのである。

- (6) サイエントロジーは排他的なセクト宗教ではない。ほとんどの信徒がサイエントロジーだけを実践しているが、必ずしも以前に信仰していた宗教を捨てる必要はない。
- (7)1994年に40周年を記念して国際サイエントロジー教会が発行した小冊子によると、サイエントロジー教会の宗教的性格は、1950年代の初めから主張されていた。ロサンゼルスに本部を置く国際サイエントロジー教会は、(キリスト教科学のボストン教会と同様に)マザー・チャーチ(母体教会)と呼ばれている。教会員や教団員への照会(reference)、聖職者による礼拝、教会関連の慈善事業が行われている。さらに最近私たちがサイエントロジストに対して面接していた間に、宗教的な要素がますます強調されてきた。徐々に宗教的性質を示してきた結果、設立当初は個人的な問題の解決法を探している人々を引き付けていたサイエントロジーは、今では宗教を探している人々を引き付けるようになった。サイエントロジーが発展するにつれ、ダイアネティックスは全体の進行の一部となった。
- (8) サイエントロジーはユートピア的な要素を含んでいる。L.ロン ハバードは「地球をクリアーにする」というユートピア計画を発案した。これは、狂気や犯罪や戦争のない社会、能力のある者が栄え、誠実な者が権利を手にする社会、人間が何の束縛もなく、より高いところを目指せる社会を実現しようとするものである。自発的に道徳を実践する(開かれたベルクソンの道徳)ことにより、間違った生活をすべて正し、さらにセイタンの回復を通して倫理性を高めていこうとする。サイエントロジストの数の増加とともに、世界はより良くなっていくはずである。
- (9) サイエントロジーは現代社会の中で生まれた。現代社会からさまざまな要素(技術の適用、確立された方法論を用いたアプローチ、コミュニケーションの重視、幸福の追求、組織についての理解、個人的体験の重視)を取り入れ、それを古代の精神的伝統と融合させている。

L. ロン ハバードとサイエントロジストは、合理性を追求しながら神秘主義的な道を歩み、自己変革と世界の変革に力を尽くしている。恐らく、ここにこそ、さまざまな宗教の中で異彩を放っている理由があるのだろう。

レジ・ドリクブール 1995 年 9 月 22 日

著者について

レジ・ドリクブール (Régis Dericquebourg) は、リール第3大学 (フランスのリール) の宗教社会学教授である。パリ大学で心理学の学位を取得後、ソルボンヌ大学で社会学の博士号を取得。現在は、国立科学研究センターに勤務している。

1972年以来、少数派宗教の研究に専念している。エホバの証人のオブザーバーを3年間務めた。